

岐阜大学 工学部 井上 肇, 時実 公生

北海道大学工学部 宇土沢 光賢

1. まえがき

構造物の振動や歪みの解析の際、行列の固有値を求めることが必要となるが、構造物が複雑になればなるほど、精度を要求すればするほど、行列は高次となり、計算労力は莫大なものとなる。ふつう、高次の行列の固有値問題の解法としては、任意のベクトルを反復してかけてゆく乗ベキ法、Jacobi法、Givens法等が多く用いられているが、ここでは、乗ベキ法 (Power Method) の持つ性質を吟味し、その性質を利用して、反復の回数を減少させようとするものである。

2. Power Method とその改良のための一試案

たとえば、構造物の振動問題では、行列の固有値問題は次のように現われてくる。

$$M\ddot{x} + Kx = 0 \quad \text{—— 自由振動の運動方程式 (n元) ——} \quad (1)$$

ここで M : Mass Matrix, K : Stiffness Matrix, x : 変位ベクトル $x = \bar{x} \cos \omega t$, $\bar{x}$: 位置のみを示すベクトル, ω : 円振動数, (1)を変形して, $A = M^{-1}K$, I : 単位行列, $\lambda = \omega^2$ として

$$(A - \omega^2 I) \bar{x} = 0 \quad \text{あるいは} \quad A \bar{x} = \lambda \bar{x} \quad (2)$$

几个の固有値を大きさの順に $\lambda_1 > \lambda_{n-1} \geq \lambda_{n-2} \geq \dots \geq \lambda_1$ とし、それらに属する固有ベクトル $\bar{x}_i$ が求められておれば、次のようにかける。

$$A = \begin{bmatrix} \lambda_1 & & \\ & \lambda_2 & \\ & & \ddots \\ & & & \lambda_n \end{bmatrix}, \quad X = [\bar{x}_1, \bar{x}_2, \dots, \bar{x}_n] = \begin{bmatrix} x_{11} & x_{12} & \dots & x_{1n} \\ x_{21} & x_{22} & \dots & x_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ x_{n1} & x_{n2} & \dots & x_{nn} \end{bmatrix}, \quad A X = X \Lambda \quad (3)$$

任意のベクトル U_0 を固有ベクトルに展開して

$$U_0 = \{U_1, U_2, \dots, U_n\} = X C, \quad C = \{C_1, C_2, \dots, C_n\} \quad (4)$$

(4)を(2)に代入すると

$$A U_0 = A X C = X \Lambda C = \begin{bmatrix} \sum_{i=1}^n C_i \lambda_i x_{i1} \\ \sum_{i=1}^n C_i \lambda_i x_{i2} \\ \vdots \\ \sum_{i=1}^n C_i \lambda_i x_{in} \end{bmatrix} = \lambda_n C_n \begin{bmatrix} x_{n1} + \sum_{i=1}^{n-1} (\lambda_i / \lambda_n) (C_i / C_n) x_{i1} \\ x_{n2} + \sum_{i=1}^{n-1} (\lambda_i / \lambda_n) (C_i / C_n) x_{i2} \\ \vdots \\ x_{nn} + \sum_{i=1}^{n-1} (\lambda_i / \lambda_n) (C_i / C_n) x_{in} \end{bmatrix} = \lambda_n C_n U_1 \quad (5)$$

この U_1 と A の右からかける演算を k 回くり返すと

$$A^k U_{k-1} = \lambda_n^k \begin{bmatrix} x_{n1} + \sum_{i=1}^{n-1} (\lambda_i / \lambda_n)^k (C_i / C_n) x_{i1} \\ x_{n2} + \sum_{i=1}^{n-1} (\lambda_i / \lambda_n)^k (C_i / C_n) x_{i2} \\ \vdots \\ x_{nn} + \sum_{i=1}^{n-1} (\lambda_i / \lambda_n)^k (C_i / C_n) x_{in} \end{bmatrix} = \lambda_n^k U_k \quad (6)$$

$\lambda_i / \lambda_n < 1$, かつ $C_n \neq 0$ とすれば、十分大きい k に対して $(\lambda_i / \lambda_n)^k \ll 1$ であるから

$$U_k \approx \{x_{n1}, x_{n2}, \dots, x_{nn}\}, \quad A U_k \approx \lambda_n U_k \quad (7)$$

として、固有値 λ_n と固有ベクトル U_k は定まる。通常、 U の収束の判定条件としては、各要素

$$|d_{j,k}| = |U_{j,k} - U_{j,k-1}| < \varepsilon, \quad \varepsilon: \text{正の小さい数にたとえば } 10^{-p}, \quad p: \text{正の整数} \quad (8)$$

$$g_i = \lambda_i / \lambda_n, \quad \beta_i = C_i / C_n \text{ とすれば } d_{j,k} = \sum_{i=1}^{n-1} g_i^{k-1} (g_i - 1) \beta_i x_{ij}, \quad (j = 1, 2, \dots, n) \quad (9)$$

g_{n-1} は g_{n-2} 以下に比べてある程度大きいとし、相当大きい k について $g_{n-1}^k \gg g_{n-2}^k$ であるから

$$d_{j,k} \approx x_{n-1,j} \beta_{n-1} (g_{n-1} - 1) g_{n-1}^k \quad \text{ここで } \alpha_{n-1,j} = x_{n-1,j} \beta_{n-1} (g_{n-1} - 1) \text{ は } k \text{ には無関係であるから}$$

U の収束判定条件と、 k の最低見込値は

$$|d_{j,k}| = |\alpha_{n-1,j} g_{n-1}^k| < \varepsilon = 10^{-p} \quad \therefore k > (p + \log_{10} \alpha_{n-1,j}) / \log_{10} g_{n-1} \quad (10)$$

とされる。

この考察をさらに進め $d_{j,k}$ の k による変化を考へる。

$$d_{j,k} = \sum_{i=1}^{n-1} \alpha_{ij} g_i^{k-1} = \alpha_{n-1,j} g_{n-1}^{k-1} \left\{ 1 + \sum_{i=1}^{n-2} (\alpha_{ij}/\alpha_{n-1,j}) (g_i/g_{n-1})^{k-1} \right\} \quad (11)$$

$d_{j,k}$ と $d_{j,k-1}$ の比 $r_{j,k}$ は

$$\begin{aligned} r_{j,k} &= d_{j,k}/d_{j,k-1} = (\alpha_{n-1,j} g_{n-1}^{k-1} \{ 1 + \sum_{i=1}^{n-2} (\alpha_{ij}/\alpha_{n-1,j}) (g_i/g_{n-1})^{k-1} \}) / (\alpha_{n-1,j} g_{n-1}^{k-2} \{ 1 + \sum_{i=1}^{n-2} (\alpha_{ij}/\alpha_{n-1,j}) (g_i/g_{n-1})^{k-2} \}) \\ &= g_{n-1} \{ 1 + \sum_{i=1}^{n-2} (\alpha_{ij}/\alpha_{n-1,j}) (g_i/g_{n-1})^{k-1} \} / \{ 1 + \sum_{i=1}^{n-2} (\alpha_{ij}/\alpha_{n-1,j}) (g_i/g_{n-1})^{k-2} \} \approx g_{n-1} (1 - \sum_{i=1}^{n-2} (\alpha_{ij}/\alpha_{n-1,j}) (g_i/g_{n-1})^{k-1}) \end{aligned} \quad (12)$$

{ } 内の第 2 項は、相当大きい k については、1 に比べて相当に小さいと考えられるので、 $d_{j,k}$

は、近似的に公比 $r_{j,k} \approx g_{n-1}$ をもつ等比級数であると考えてもよい。この性質を利用して、Power Method の Trial Vector U_k に修正を施すことにより、固有ベクトル $\bar{x}_n$ により高い近似をもつ、ベクトル U_{k+1} を得ることができる。すなわち

$$U_{j,k+1} = U_{j,k} + d_{j,k} r_{j,k} / (1 - r_{j,k}), \quad (j = 1, 2, \dots, n) \quad (13)$$

(13) は、Power Method の考え方を援用したにすぎず、個々の $r_{j,k}$ を用いる理由は余りないので、ベクトル全体の平均値 $\bar{r}_k$ を用いてもよい。しかし g_{n-1} etc は未知であるため、得られたベクトルについて、 $d_{j,k} r_{j,k}$ を求め、何らかの判定基準を設けて、ベクトル修正の適否を判定すべきである。

こゝでは、次の基準によつて考え、そのうち、どれ

か一つのみが満たされればよいとしたい。

$$\left. \begin{aligned} (a) \quad & |\bar{r}_k - \bar{r}_{k-1}| < \varepsilon_1 \\ (b) \quad & |r_{j,k} - \bar{r}_k| < \varepsilon_2 \end{aligned} \right\} \quad (14)$$

この方法の Flow chart を右に示す。

この方法によつて、行は、1 に計算 (19 元) では、修正を行わねばいす法に比べて、とくに大きな k のとき、著るしい効果がある。数値例は当日にゆずる。

次 数	1	2	3	4	5	6
通常法	13	25	65	18	300 以上	計算せず
修正法	13	19	21	18	37	20
固有値	285.96	5.7893	2.8418	2.1383	6.9163	6.6971

参考文献

- 1 森口、高田：数値計算法 II
- 2 清水留三郎：行列の固有値問題、第 4 回電子計算機活用セミナーテキスト
- 3 山内森口、松：電子計算機のための数値計算法 I
- 4 Zummühl, R. : Matrizen und Ihre Technischen Anwendungen
- 5 Todd, ed : Survey of Numerical Analysis

